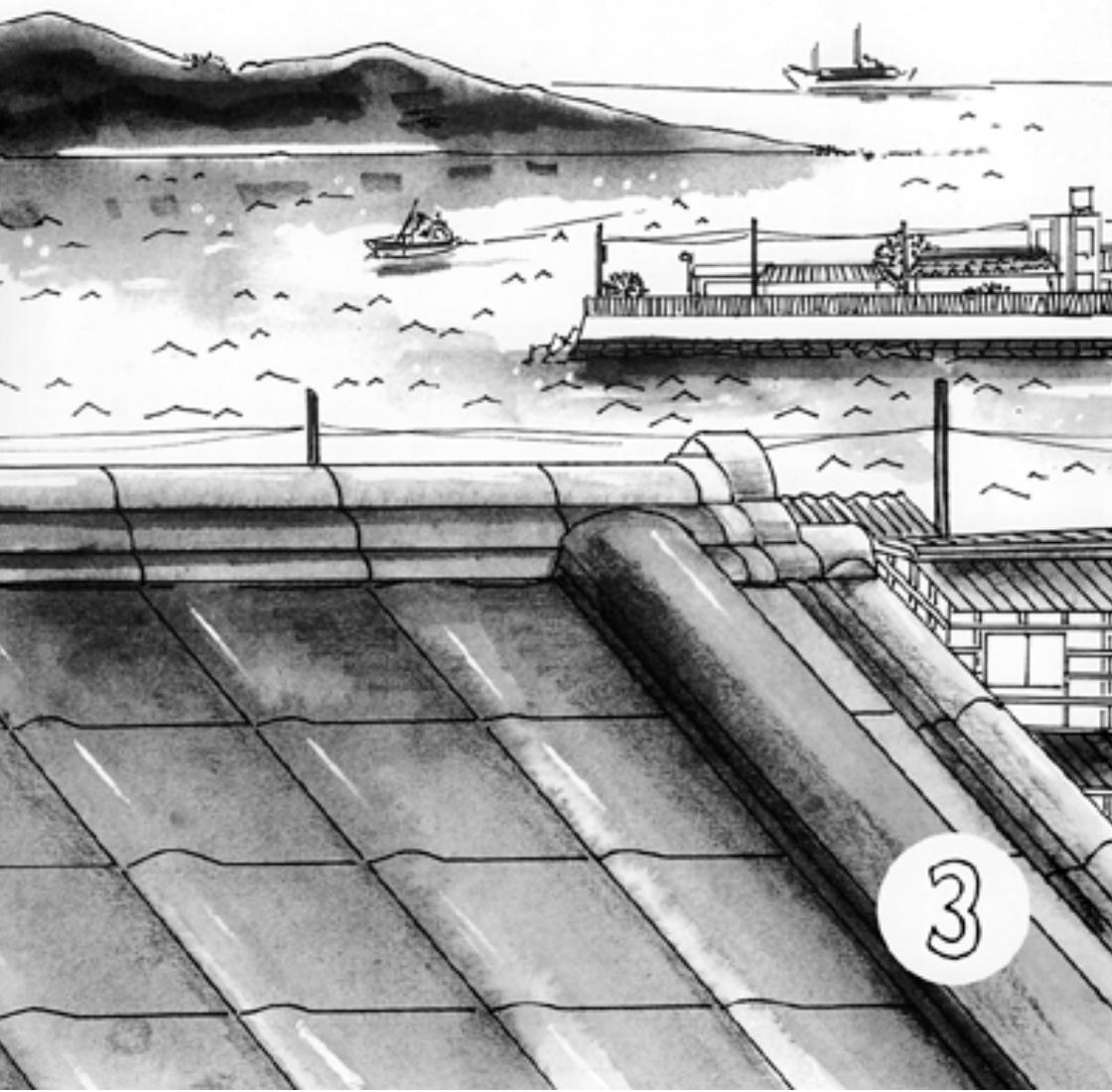


令和2年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第60巻3月号(通巻728号)

風土



3

剪定の下枝一服せるを見ぬ

(句集『四温』より昭和四十八年作)

この句は、庭師が木を降りて一休みしているのを桂郎師が見ている景色です。普通は剪定の様子を句にするのですが、桂郎師は地上の庭師を句にしました。この庭師は一服の後、庭全体の植木を眺めるにちがいない。剪定の前のイメージと合っているだろうか。実は庭師の仕事は、地上での眺めが大事なことを桂郎師は知っているのです。あえて「見ぬ」とした所以です。

駒鳥や地下足袋に縄結び足し

(句集『四温』より昭和四十八年作)

「駒鳥」から鶴川村に田園が広がっている頃の景色を想像します。「地下足袋に縄結び」とありますから、農家の人でしょう。縄を結ぶのは滑り止めのためです。恐らく滑りやすい坂を越えるのでしょう。このころの道はまだ舗装が進んでおらず、ひよっとしたら桂郎師も、荒縄を靴に結んで町へ出かけたのかもしれない。懐かしさを感じる世界です。

わが系譜波郷桂郎椿咲く

(句集『貴椿』より平成十二年作)

石川桂郎は石田波郷の「鶴」の高弟として活躍しました。そして「風土」の主筆となつてからも「鶴」の同人にとどまるほどの信頼関係にありました。器師はわが俳句の系譜を思うにつれ、揺るぎないものを感じるのです。そのことを波郷の「一つ咲く酒中花はわが恋椿」、また桂郎の「釘付けにさる袖隠てふ椿見て」そして自身の「たまきはる白のひびけり貴椿」と「椿」を象徴として表現したのです。いずれも波郷、桂郎、器の代表的な句となっております。

すぐ消えて妻の使ひに揚羽蝶

(句集『貴椿』より平成十二年作)

器師は最愛の妻を平成六年に失っています。その後の句集『幻』は妻に捧げる挽歌といえるほどの妻恋の句集になっています。それから数年が経っても、妻の魂はいつでも器師の近くにいます。目の前に現れ、たちまち過ぎ去った「揚羽蝶」は妻の魂の使いなのではないかと思ってしまうのです。

竜の玉

南うみを

浮かび出て吾を一瞥かいつぶり
骨の傘枯芦原に突き刺さり
漢くる枯野の匂ひまとひ来る
磐座へひびく若水汲みにけり
わが畑の畦踏んまへて初御空
初寢覚いくつ割れ目を跳んだやら
初風呂の臀のたるみなんとせう
初社素十の鴉放ちけり
葉牡丹の埃はらふも事務始
落城のごとく三毬杖くづれけり
掘り上げて茅舎の寒の土筆これ
ここは昔海であつたと竜の玉
芹洗ふ猪の足跡すぐそこに



竹間集

同人作品



冬 鷗 内藤 静

一陽来復ヒマラヤの空真紅
凧や直線日本大通り
百飛んで海は翳らず冬鷗
雪もよひして甲板の傾ぎたる
喝采ともはた蜂起とも花八手
籠りゐることの楽しき障子かな
根深汁東京言葉で太つ腹

福 沸 高村 令子

大いなる未知の刻吊る初暦
母と娘につながる記憶福寿草
指なめて寝落ちゆく児や福沸
繙きて分厚き過去や去年今年
源氏読む夜寒の膝を組み直し
手を触れて仰ぐ法塔冬桜
ちんまりと母の居眠り春炬燵

文化の日 土井 三乙

三千歩歩いてをはる文化の日
境内に火を焚きし跡冬来る
冬構狭き路地なほ狭くして
極月の街疼く歯を宥めゆく
雲割きて月新しき冬の夜
風の日の影を支に立つ冬木
初日さす鎮守の朱の遠見えて

根深汁 林いづみ

十二月隼町から六丁目
赤き絨緞踏みてロビーのシャンデリア
葱束を抱へ師と乗る山手線
御濠まで遠出あまたの冬鷗
根深汁いざ流星群見に出でよ
街師走氏子に配る火伏札
冬風ぎの湖に肩寄す一家族

初明り 小林共代

初明り扉に九品来迎図
御神灯会津絵曆開きけり
江戸の世の臥竜の松の淑気かな
良寛のこゑのさながら手鞠唄
鶴歩く北の大地に淑気かな
房の国伊八の濤と冬の鳶
冬ざるる楡の一樹に鳥の寄り

年詰まる 中根 美保

着ぶくれて子ら勢へり滑り台
人参を掘りに地下足袋地を掴む
拾ひたる星戻しやる聖樹かな
水滴に出物のありて年の市
ほどかざるままの一荷や年詰まる
谷戸深く音沈ませて除夜の鐘
すれ違ふ窓ぴしと鳴り初電車

初 曆 間島あきら

初暦真白き未来ありにけり
吊れば即松蔭とどく初ごよみ
醒めきらぬ大河の蛇行鷹上がる
横雲を日の燃え立たす大旦
完璧な日輪生るる淑気かな
三山を楯に霜置く蛇笏句碑
雲描く叙事詩「ホメロス」鷹の天

湖北暮春

岩木茂

夙古るや霞の上の比良比叡
比良八荒篁の竹打ち合へり
鯖街道けぶらす杉の花粉かな
飄々と水の漂ふ座禅草
座禅草雨の水輪の中にあり
春耕のど真中なり伊吹山
上流の空濃くなりぬ稚鮎汲み
弓なりに川を抱ける上り築

奥琵琶や湖族の墓所の大桜
みづうみの夙舟迎ふさくらかな
春鴨の横切つていく竹生島
葦焼くや火を湖に傾けて
花万朶大音は水のしづけさに
菜の花は蝶に蚕は糸吐いて
白無垢の光りでありぬ春の繭
繭の香のほのと八十八夜寒
スコップを田に突き立てて目借時
花の屑もろとも畦の塗られをり
畦塗つて湖北の空へ立ち上がる
雪竿を顕わに余呉の暮春かな

山河集

同人作品



南うみを選

少年のごめんと言へぬ息白し 松本 胡桃

大きくさめ女の仮面外しけり
百人を振り向かせたる大きくさめ
乾物を使ひきつたる十二月
冬の日を片ほほに受け読書かな

雨粒を一つひとつに梅もどき 森高 武

腕時計遅れてばかり日短
山雀の移れば枯葉落ちにけり
冬の滝僅かな水を響かせて
木ささげの揺れて雪雲近づきぬ

ようと打つ眼力の鋭き初鼓 小原美美子

初声のひびきて空の展けゆく
肩上げの鈴を鳴らしてお元日

苔匂ふおぐらき礎や寒の入
初風の中洲につばさ広げをり

飴切りの音に追はるる果大師 雨宮 桂子

母恋ひの少年覆ふ寒夜かな
雪吊の向かうに来迎のひかり
歳晩や介山居士にコップ酒
菰巻いて一本松の太つ腹

雑木林音を違へて木の葉降る 森田 節子

凧へ眼みひらく土隅かな
斜め入る日差しきららに冬至かな
夕映えに緑の金色冬の雲
梟の 声か 信玄狼煙台

風土独語／南 うみを



大きくさめ女の仮面外しけり 松本 胡桃

「くしゃみ」をすると、目鼻がばらばらになったような感覚になります。それも「大きくさめ」です。取り澄ました女性のあられない顔を「仮面外しけり」と見立てました。

雲へ力明日へ力寒茜 根岸 善行

作者は、雲を真っ赤に染めた束の間の「寒茜」を「力」と捉えています。一番寒い時ですが、春がそこまでやってきていますので。「明日へ力」に作者の前向きな心持が出ています。

冬の滝僅かな水を響かせて 森高 武

夏と違い「冬の滝」の水量はめっきりと減ります。しかし作者は、はつきりとその滝音を聞いています。枯れの世界での「冬の滝」の存在感を、しかと受け止めているのです。

浮寝鳥目覚むる鳥と寝入る鳥 三嘴 康子

この句は、どれも同じように見える「浮寝鳥」にぐいと近づいて、その細部を描きました。ほらほら、さつき目を覚ました鳥や、これから寝入る鳥がいますよ。これが「浮寝鳥」の現実です。

初声のひびきて空の展けゆく 小原美美子

「初声」は正月に聞く鳥の声です。普段気にならない雀や鴉の声も淑気に満ちて聞こえてきます。それが響いて青空が広がってゆくと詠んでいます。晴れ晴れとした世界です。

冬滝を水かげるふの昇り行く 森高さよこ

「水かげるふ」は水面の揺れに日が差し、その照り返しが壁や木の幹に映る現象です。この場合は、滝壺の照り返しが滝水に映り、まるで生き物のように遡る様子を幻想的に描きました。

雪吊の向かうに来迎のひかり 雨宮 桂子

「来迎」とは臨終の際に仏や菩薩を迎えにくることを言います。恐らく作者は「雪吊」を天蓋と見て、その向こうに来迎の光を見ているのです。作者にはあの世とこの世の境がないのです。

スリッパと冬のばら揚げ退院す 山田 健太

普通は退院の薔薇は句の素材にしますが、「スリッパ」までは登場させません。しかし作者は現実を見据え、「スリッパ」を揚げさせました。薔薇を「ばら」としたところにも捻りがあります。

雑木林音を違へて木の葉降る 森田 節子

「雑木林」ですので、いろいろな木々があります。その葉も色々です。当然、降る音も違うはず。それぞれが自然の音です。

風土集



南うみを選

一斉に北向く羅漢冬に入る 京都

杉本葉子

冬菊や不動の丈は五寸ほど

綿虫の影の無き身を悲しめり

綿虫やあの世この世と行きもどり

綿虫のひかりの中の命かな

カシヤカシヤと落葉を踏んで満一歳 綾部

四方由紀子

風に舞ふ紅葉のなかや喃語飛ぶ

音たてて蟻螂の雄食はれたり

獲物食む鴛に車停めにけり

猪狩か銃声響き犬の声

思ひ出話尽きぬ二人や日向ぼこ いわき

平井 改子

南瓜切るこれが最後と力入れ

亡き母を訪ふと言ふ夫神無月

夫の何かが壊されてゆく神の留守

小春日の光る小石を掴みもし

駆け下りる秋と麓ですれ違ふ 町田

松本 胡桃

怪獣の面より覗く秋祭

切干の蕈も混じりて届きけり

父の背に小さなラガー挑みけり

ぐい呑みに辛子伏せ置く花八ッ手

自販機の釣銭熱き震災忌 舞鶴

小原美美子

暁をとむらふやうに鉦叩

ファッシュンヨーのセンター八十路紫苑晴

暮れなづむ富嶽の反りや小六月

冬晴へ棟上げの餅放り上ぐ

眼の黒点我を放さず枯蟻螂 相模原

岡本 尚子

唐橋を日の渡りゆく芭蕉の忌

山茶花や刻なき鐘に散り急ぐ

粕汁や郷にひとつは醸造所

粕汁や酒豪の母と下戸の父